

June 2010 Newsletter

～CICD からの重要なお知らせ～

Level 5 (Foundation Degree) Diploma in Management and Leadership

2010年7月1日より CICD のプログラム (Development Instructor Programme) は、Level 5 (Foundation Degree) Diploma in Management and Leadership へと承認され、従来のプログラムよりレベルアップ致します。

今後、CICD は Chartered Management Institute (CMI) と協働していきます。CMI は様々な国で多くの会社、カレッジや団体と一緒に、マネジメントとリーダーシップ・トレーニングのディプロマとコースの提供・管理を行っているイギリスの団体です。(CMI については <http://www.managers.org.uk/> を参照。)

皆様をご存知のように、CICD プログラムではマネジメント・スキル、リーダーシップ能力やその他、多くの実践的なスキル育成のトレーニングを目的として参りました。今後の CICD プログラムに大きな変化はございませんが、この分野にこれまで以上の焦点をあてた、プログラム内容の向上を計っていきます。

今後とも CICD をどうぞよろしくお願い致します。

2010年7月 CICD

Newsletter 目次 :

- **Page 2** Back to the Future –By Jose
- **Page 3** The Open Day at CICD –By Celine
- **Page 5** About My experiences with DmM –By 浦 輝大
- **Page 6** First Report from Angora –By Gray
- **Page 9** 事後研修の人たちからのコメント



College for International Co-operation and Development

Winestead Hall,
Parrington Hull,
HU12 0NP
England

Contact Details;

Tel: +44 (0) 7813 854 298
+44 (0) 1964 631 826

Fax: +44 (0) 1964 631 826

Mail: cicd05@yahoo.co.jp

Web: www.cicdvolunteer-japan.org.uk/

Back to the Future

私たちガイアプログラムのメンバーは、惑星の未来について仮説を立て1つのエッセイを作りました。以下の物語は、私の想像力から生まれたものです。

時は1983年で、私はまだ子どもでした。私は学校の友達と一緒に、近くの川で遊んでいました。きれいな水と大きな魚たちは、私たちみんなのものでした。水の中ではしゃぎ、カエルを捕らえようと遊びながら、その後に私たちは木の木陰に座ってベリーを食べていたものです。毎日はとても楽しく、充実したものでした。

春は私たちに花と水をもたらし、散歩や美しい自然を楽しむのに絶好の季節でした。夏になると太陽と収穫のためのハードな仕事が待ちうけ、果物のあまいかおりがしました。そして、美しい秋になる頃には学校の友達と再会し、そうして冬を迎えた頃には平和と静けさをもらたします。そう、私たち田舎の生活は極めてシンプルで、そして美しいものでした。

時が経ち、私は少しずつ成長します。私は大きな都市へと移りました。空気は煙と埃まみれで、近所には知らない人ばかりで通りを歩く人たちは挨拶もしません。また、空の星をみることができません。しかし、そこで私は愛と幸せを見つけることができました。私はその時に出会った女性との間に子どもをもち、私たちはやがて田舎へと移り住みました。

私たちは家族は、私の故郷で両親が残してくれた小さな土地を耕す農業生活を送っていました。私たちは幸せでしたが、次第に自分たち家族の周りに訪れる自然の変化に気づき始めました。2010年、土地はものすごい乾燥にみまわれました。1つの川は乾ききり、そのほかの川は汚染のために二度と泳ぐことができなくなりました。学校は閉鎖され、村を取り囲む森は焼けてしまいました。

基本的な日常生活は困難になりました。耕す土は以前のように肥沃ではなく、水不足の現実は私たちに移動の必要性を教えてくれました。夏はとても暑く、冬は寒くなっていきます。そのため、私たちはいくつかの野菜とチキンを育てることしかできなくなりました。

数年後、私たちは旅のグループに参加して北に移ることを決意しました。私たちは、災害で生き残った人々に供給される食糧を得て生活をしていました。北へ移る道のりで私たちは、世界中の大きな都市の人々が津波やその他の自然災害で亡くなったことを耳にしました。

数年後、私たちは北の山地に到着し、私たちと同じようなサバイバル生活を送っている人々と出会いました。私たちはよりシンプルで、幸せな新しい生活を始めました。人種のるつぼの中で、しかしながら、私たちはボディ・ランゲージを使いながら意志の疎通をはかり生活を共にしました。

2050年—私は年老い、妻は2人目の孫が生まれた後に亡くなります。私はそのことに対して、そう深く嘆き悲しみません。なぜならば私は彼女と再び会うことを知っているからです。ただ、形が違っているだけでしょう。私はこの頃には、新しい大陸の人々に会うことができないことを嘆いているでしょう。しかし、私は彼らがここに居る私と同じように平和であることを祈っています。

私がこの物語をあなたに語ったのには、理由があります。それは、人生とは一時のあかないもので、常に変化していくものだということをおあなたに覚えておいてほしかったからです。私はあなたや子どもたちが素敵な未来を過ごせることを祈り、この1つの物語を未来の希望とともに語ったのです



2010年ガイアチーム Jose (ポルトガル出身)

The Open day at CICD

私たち CICD の生徒とスタッフは、オープン・デーを CICD で開催することにしました。これには、私たちの学校が具体的にどのような活動をしているかを、地元住民の人々を中心により多くの人々に知ってもらうためです。

このイベントはとても特別なものでした。なぜなら私を含めた 5 月チームは、本格的にプログラムが始まってまだ 2 週間しか経っておらず、イベントの計画や準備、人々を招待するという多くの活動を行うのが始めてだったからです。

また、このイベントは同時に私たちがチームとして活動し、協力し合って活動するという能力を試すという点においても、とてもいい機会だったと思います。オープン・デーでは、演劇、展示、ゲームと CICD の日常生活をあらわしたムービーを流したり、もちろん、食べ物とドリンクのサービスも行いました。



Twister game on Open Day at CICD



Exhibitions of our work in Africa and India

この日はちょうど、アフリカとインドから戻ってきた人々による彼らの活動とプロジェクトについての展示会も行われました。彼らはダイニング・ホール（食堂）を、アフリカ（アンゴラ、マラウイ、モザンビークと南アフリカ）とインドで撮った写真と持ち帰った品物で飾りつけました。彼らは私たちや訪れた人々に現地での経験や生活、プロジェクトについて多くのことを話してくれました。私たちはもちろん、ゲームの準備もしました。ブランケットに絵を描いて用意した「トウイスター」や、日本人の浦さんが子どもたちのために準備したゲームを訪問した人々と一緒に楽しみました。



Origami workshop by Suk-yi & Sol



Keita and the solar stove



Pizza team Luis, Eric and Lasse



Ura's games for children

私たちは実は多くの人たちがオープン・デーに訪れることを、そんなに期待していませんでした。しかし、思った以上の多くの人々が来てくれて、私たちはとても嬉しくて驚いたことを覚えています。私たちはドリンクと軽食を訪れた人々に手渡していきました。これらは、私たちのチーム・メイトが用意してくれていたケーキやジュースです。なので、1つ1つ手作りでその上、各国の伝統的なスイーツを楽しむことができました。訪れた人々たちは普段、滅多に口にしない様々な国のデザートをととても楽しんでいました。

3時になると演劇がはじまりました。3月チームのみんなはとても緊張していたみたいですが、とても上手に演じていたと思います。ゲストはもちろん、私たち生徒やスタッフのみんなはこの日をとても楽しみ、最後は手作りのピザと一緒に食べてお腹一杯になりました。

オープン・デーでは、私たちはゲストに自分たちの国や文化のこと、そしてイギリスという国に来た感想を話したりもしました。この日は珍しく1日中晴天で、ゲストの人々は子どもや大人も含めて催されたゲームや展示、演劇を楽しんでくれたようです。

この日は私たち自身が予想していた以上に、うまく物事が進んだ1日でした。訪れた人々が楽しんでくれたことが何より私たちを喜ばせてくれることであり、かつ誇りに思える部分でもありました。今回の経験は、私たちがアフリカ・インドに派遣されたときにでも、十分に活かすことができるものだったと思います。

2010年5月チーム Celine (フランス出身)

About My Experiences with DmM

私は浦輝大（てるひろ）といい、2010年5月チームに参加しています。私はアメリカン・フットボールの社会人チームに属し、2001年にはナショナル・チャンピオンシップでは優勝したこともあります。（現在は引退しています。）

私は2007年～2009年までの間、JICAの青年海外協力隊でバヌアツにいました。自分の専門が体育であったこともあり、主にスポーツを教えながら2年間、彼らと一緒に時間を過ごしました。私がCICDプログラムに参加を決めたのは、アフリカで活動したいということもありましたが、それと同時に世界中から集まる人々と一緒に、インターナショナルな環境でボランティアについて考える機会を持ちたかったからです。

さて、CICDプログラムの学習スタイルは、DmMというデータベースをしようとしたものがメインとなっていきます。DmMの特徴は、学習と実践の両面から学べるということです。今回は、実践面の部分についてだけ説明します。

CICDでは各学生ごとに、学校運営に関わるそれぞれの役割があたえられます。「Responsibility Area」と呼ばれていて、これはチームで協議して決めるのですが、例えば私なら「キッチン」となります。キッチンが担当になった場合、学校の食材の買出しや、そのための予算の協議、車の手配など全てが任せられます。他にもそれぞれの役割分担があり、各学生は自分に割り当てられた担当分野を責任をもって行う必要があります。その他にも、先日行われたオープン・デーの企画や運営、モーニング・スポット（朝会）の実施などもDmMの課題の1つとして加算されることとなります。

DmMは全てポイント制です。実践面の場合、まずは自分の活動評価を客観的にレポートとしてまとめ、担当の先生に提出します。その際、私たちは何が成し遂げれて何ができなかったのか、次に繋げていくために何をしないといけないかを論述しなければなりません。先生は私たち生徒の書いたレポートを踏まえながら、実際の私たちの活動の評価を行い、ポイントを加算していきます。CICDでは、机上だけの学習は行わず、このように自分がリーダー・シップをとって何か特別活動を企画・運営する能力の育成もはかります。一見、簡単そうですが、様々な国籍や文化の違う人たちと活動することは難しいです。コミュニケーションもうまくとれないときが多く、議論になることもしばしばです。これは、私たちがアフリカ・インドに派遣され、自分で活動をまとめていく立場になれば尚更、言えることでしょう。なので、このような数多くの実践を踏むことは、いずれアフリカ・インドへ派遣される私たち生徒に役立つものといえるでしょう。



2010年5月チーム 浦 輝大（日本出身）



First Report from Angola

しばしば、1日の中で何回か、足が1つしかなく松葉杖で体を支えている女性を目にします。そして、彼女は頭の上に何かをのせて、バランスよくそれを運んでいます。私は彼女が何を運んでいるのかはわかりません。

しかし、私は彼女が何キロもの坂道を歩き、彼女が家に戻る頃にはお腹をすかせ、喉が渇いている子どもたちが待っていることを確信しています。これはアンゴラという国をあらわす、1つのイメージともいえます。私は彼女がなぜ、片足しかないのかその理由は知りません。おそらく彼女は、1975～2002年に勃発したアンゴラ内戦の犠牲者だと思われます。この内戦では、約50万人もの人々が犠牲になったといわれています。どの場合においても、彼女はこの国の悲劇と不自由な象徴ともいえません。

7週間前、私はハンガリー人の他のDIであるフェーレンスと一緒に、このBenguelaにあるTeacher Training College (TTC、小学校教員養成プロジェクト)に派遣されました。ここは、アンゴラ首都Luandaから100マイルほど南に位置するところです(アンゴラの丁度中心部)。このTTCの生徒たちは、学校での訓練を受けた後、地元の特に小学校の先生が不足している地域にて先生となります。

このプログラムに参加する前、私はイギリスで英語教師として長い間、働いていました。そのため、アンゴラのこのプロジェクトで活動するにあたって、私は教師として働いた経験をいかに活かせるかを示さなければなりません。しかし、これはそう簡単ではありません。ここアフリカの土地で教えるということは、私がこれまでヨーロッパの学校で経験してきたことがそのままアフリカで通じるものとは言えないからです。

ここでは、仮に私があるポルトガル語を理解することができなかつたら、私はそれを理解できるように努める、まさにその状態を私が彼らに示さなければならないのです。私たちは創意工夫を凝らした解決をに取り組みなければならず、その姿を見て生徒たちは学び、それを今度は自分が教える立場になったときに、彼らは自分のスキルとして次の生徒たちへと使っていくのです。私たち次第で生徒たちに与える影響が異なってきます。あなたがそれを自分自身の中できちんと理解しない限り、あなたは他の人たちと団結して一緒になって活動していくことは決してできないでしょう。

時々、私は生徒たちを理解したと思う時もあるれば、そうでないと思う時もあります。ある生徒は熱心に学びたく、かと思えばそうでない生徒もいます。これは、ヨーロッパでも同じような気がします。



アンゴラには様々な自然の資源があります。オイル、ダイヤモンドーだけど、どこかが間違っているのか、国が間違っているのかーここはまだ貧しく、資金も必要とされているところに投資されていません。独立後、ポルトガルの植民地者たちは、これらの資源とともにアンゴラを去ったことができます。外国の権力はアンゴラの資源を獲得するために干渉を引き起こし、これが内戦が長続した理由の1つともいえます。アンゴラ内戦は冷戦によってうまれたもので、その代償は今でも尾を引いています。そしてそれは、私たちが西欧などの先進諸国で豊かな生活を送っているのと引き換えになっています。

外部の人たちは、この内戦による破壊的な影響がどれだけコミュニティの人たちの精神に影響を及ぼしたのか、知る由もありません。平和と安定であった状況が突然、外国からの圧力に脅かされて混乱に陥ったのです。

ここアンゴラでは、大きなプロジェクトでは人々をうまく組織化することが困難です。ここの生徒たちの中には他の理由から働かない人もいるし、それ以前に多くの人たちがなぜ働かないといけないのかという疑問をもっています。しかし、例えばそれは私の国イギリスでも同じことが言え、ここアンゴラでは彼らの仕事に対する姿勢が違うだけなのです。どのような場合でも、このような状態は時間の経過とともに変えることができます。発展を遂げる機会を与えることは、この国と人々に繁栄をもたらします。

ここの初めてのプロジェクトは、オーガニックの野菜ガーデニングをつくることから始まりました。私たちの目標は学校の人たちに十分に栄養のある食糧を与えることであり、同時に学校の資金を節約して近所の農民の人たちのよい手本となるために始めたのがきっかけでした。それは私がアフリカに来る前から抱いていた熱望でもありましたが、私はとても限られたことしか理解していなかったのもまた事実です。フェーレンスと私はこのプロジェクトについてのレポートを読み、たくさんの良いアイデアも思いつきました。しかし、これらは実際には使えないものでした。

このとき、私たちは自分たちの役割というものに気づきました。私たちはインストラクター（ボランティア）であり、傲慢にも私たち西洋の考えや行為を当然のことと思わないことです。私たちボランティアの俗にいう、白人としての特権や役割は、その地域の知識を持っている人たちのために使われなければならないのです。ここの生徒たちは彼ら自身で問題に対する解決ができ、それは例えば灌漑1つにしても私が一度も思いついたこともないようなものでした。



ガーデニングで働くために生徒たちを活気づけることは、とても難しく問題でもありました。それは、言語が違うからという問題ではありません。私が乾いた土地に何かを植える手伝いをすると、生徒たちの大きなグループが私を笑い計画を邪魔します。私は自分の努力が本当に報われるか、それはわかりません。

ヨーロッパ人がアフリカの現地で活動しようとするとき、彼らにとってそれは笑いをさそうものに過ぎないのかも知れません。しかし、根気強くあり続け、決してがっかりしてはいけません。私たちには前進あるのみです。最初にまいた種は、きっと良い結果として戻ってきます。



他の活動として、私たちはドミンゴ・アベトス（オープン・サンデー）の企画に関わりました。私たちはイベントを学校のミッションとして観光客と一緒に企画し、いくつかのプレゼンテーションとエンターテイメントを行いました。このイベントは成功し、また近いうちに企画したいと思っています。

アフリカの人たちを「怠け者」とするステレオタイプの人々、もしかしたらアフリカで働くことができないかもしれません。しかし、あなたがもしも分別のある賢い人間であるならば、あなたが何らかの目標に向けて活動し、それを成し遂げることは可能です。

私たちはマラリアにかかる可能性が高い地域にいるため、常にそのリスクに気をつけなければなりません。しかし、アフリカにおける毎日の難しさ、危険と問題をじかに体験として得ることや世界を見ることは、私たちにそれが本当の問題であることと同時に責任でもあることに気づかせてくれます。例えばマラリアは私たち西洋ではないものですが、ベンゲラ（アンゴラ西部の港町）では多くの子どもたちがマラリアによって命を落とし、そしてこれはアフリカ全土で言えることです。ここでは、子どもたちは30秒ごとにマラリアで亡くなっていきます。あなたはまた、ここで地球温暖化の影響を見て感じることもできます。このプロジェクトで行われている植林活動は、砂漠化を防ぐために私たちが毎週ごとに水をあげています。もし、私たちがこの活動をしなければ現地の農業は更に悪化し、事実、この国の乾季の間には、栄養失調のために多くの人たちが亡くなっているのです。

私はここで一緒に、何かを成し遂げて行くことを感じています。私は今とどのように違うことを生み出すことができるのか、それはわかりません。たぶん、それができたとしてもとても小さなものでしょう。しかし、私が自分の以前の快適で特権に満ち溢れ贅沢であった生活を振り返ってみた時、私は今ここにいる、この場所の状況を少しでも良くして変えていくことをしなければならないことを知っています。

2009年9月チーム Gray

～事後研修の人たち～

アフリカ/インドで活動を終え、CICDに戻ってきた生徒たちのコメントを紹介します。

Federico (アルゼンチン出身)

派遣国：モザンビーク

プロジェクト：Teachers Training College

CICDに参加する前、私は祖国で法律家として働いていました。私はプロジェクトでは主に幼稚園活動に力を入れ、2～6歳の子どもたちと関わりました。私は他のボランティアの人たちと一緒に、コミュニティに水を供給するため井戸を設立しました。また、マップにあるOne World Universityの生徒達と一緒にイベントを企画したりと、様々なことをしました。

プログラムは私にとって充実したもので、私はアフリカが本当に支援が必要な状態にあり、特に貧困問題に積極的に関わっていかないといけないことを学びました。



Andras (ハンガリー出身)

派遣国：マラウイ

プロジェクト：Second hand clothes and shoes

私は以前、ハンガリーでセールス・マネージャーとして働いていました。このプロジェクトでは、現地の労働者の人たちにセールスを向上するための広報活動を教えることから、カスタマー・ケア、マネージメントに至るまで、幅広い面でビジネスに関するトレーニングを行います。私がこの活動で学んだことは、「釣った魚をあげるのではなく、どのようにして魚を釣るかを教えなさい」ということです。



Edith Katalin Farago (ルーマニア出身)

派遣国：インド

プロジェクト：Academy for Working Children(AWC)

私はインドのラージャスターン州にある、AWCプロジェクトで活動をしていました。主な仕事は朝にスラム地域にある学校で英語を教えることと、午後に教材の作り方を教えることでした。また、他の子どもたちと一緒に読み書きを教えることもしました。

インドではゴミの問題があります。私たちはコミュニティで行うクリーニング活動を積極的に推進する手伝いをし、その効果は学校の先生たちがその辺にゴミをポイ捨てしないという行為の変化からも十分に効果的だったと思います。



私は例えばどうやってペンキを塗り、壊れた建物を修繕したり、井戸を作るのかという実践的なスキルを学びました。同時に、自分が積極的に何かの活動やイベントを企画し、運営していく能力も備わったと思います。また、特に自分と全く異なる文化をもつ人々とどのように生活していくのかということ、そして彼らは確かに貧しいけれど、それでもヨーロッパに居る人たちよりも幸せであるということ—たくさんを学んだと思います。

苧部 太郎

派遣国：南アフリカ

プロジェクト：Total Control of the Epidemic (TCE)

プログラムに参加する前、私は大学で心理学を専攻していました。私は南アフリカ・ヨハネスブルクで、TCEプロジェクトに参加しました。主な仕事はプロジェクトの結果を分析し、レポートを作成することと、パートナーシップ提供者への協力でした。また、私は他のボランティアと一緒にタクシー・ランクというアクションを起こしました。これは、私たちプロジェクトで、1軒1軒の訪問ができない人々を対象にしたものです。私たちはタクシー乗り場を歩き回り、そこに居る人たちにHIVとSTL-s (Sexually Transmitted Diseases) についての情報を提供しました。



私がこのプログラムで特に学んだことは、インターナショナルな考え方ができるようになったことだと思います。私の視野はとても、狭いものだったと振り返って思います。私は大学に戻り、卒業後は国際ビジネスかNGOで働いていきたいと考えています。

Hye-jin An (韓国出身)

派遣国：インド

プロジェクト CDP (Community Development Project), PRH (The Population and reproductive health capacity building)

私の主な仕事は、活動している村で村人たちと一緒に、子どもたちにポリオの予防接種を受けさせることです。また、私は衛生の大切さを訴えるレッスンも行いました。私がヒンディー語を話せなく、現場の村でコミュニケーションをとることが難しかったこともあり、私は毎日インド人のスタッフと一緒に現場へ赴きました。私は英語で衛生、避妊や予防接種などの事柄について説明し、その後、インド人のスタッフがヒンディー語に訳してみんなに伝えてくれました。



私はたくさんの写真を撮り、レポートやプレゼンテーションを毎月、本部へと提出しました。自分が果たしてたくさんをできたのかはわかりませんが、現地のスタッフのみんなが外国人である私と一緒に活動することで、人々の注目を集めてより効果的な活動ができたということを知りました。それが効をなしたのか、私たちは現場で多くのウーマンズ・クラブ、女の子や男の子のクラブ、ユース・クラブが誕生し、私たちは毎月その各グループにいくつかのプレゼンテーションを行うことができました。また、私たちは村の学校にも訪問して環境問題についての授業を行いました。

私はとても大きな機会と経験を得たと思います。もし、私が単なる旅行者としてインドに行っていたら、今こうして私が触れたようなインドの本当の状況を見ることはなかったでしょう。私はこの20年間、ただ韓国で過ごし、そのためか私は貧しい人たちが居ることを知りませんでした。もちろん、テレビでそのような光景を見ることはありました。しかし、私はそれがどのように深刻なのかを、自分自身の問題として感じることはできなかったのです。

インドで私は貧しい村で、貧しい人々と一緒に過ごしました。彼らは電気もなく、時には水もありません。一方で私が滞在していたオフィスには水があり、電気を利用できます。以前の私は、電気がどれだけ貴重なものかも知りませんでした。私は今、電気と水がどれだけ私たちにとって大切なものであるかを知っています。私はそれを、本当に経験したことから気づいたのです。だから私が韓国に戻った時、私はそのことが常に頭にあるでしょう。

JUNE 2010

Newsletter

College for International Cooperation and Development

